

## パン アジアの夢

渥美 伊都子

兵庫県の揖保川のほとりに秋恵園という小さな公園があり、ここには二百数種に及ぶ菖蒲の池を中心に周囲を散策するように出来ています。この庭園は私の父鹿島守之助の生家の一部で、そこには文化財の屋敷も保存されています。この庭園の西側に「パン・アジア」の碑が建っています。1973年に父

が自ら筆をとり記した「わが最大の希願は、いつの日にかパンアジアの実現を見ることである」という言葉が、扇面の黒御影にはっきりと刻まれております。



パン・アジアの碑と碑文

父は外務省に入省し、最初の勤務地がドイツの日本大使館でした。当時ヨ - ロッパではク - デンホ - フ・カレルギ - 伯爵のパン・ヨ - ロッパ構想が風靡しておりました。この構想は第一次大戦後の荒廢し、分裂し、対立に悩んでいたヨ - ロッパに大きな反響を巻き起こしていたからです。その頃の「実践的理想主義」や「倫理と超倫理」などの著書はベストセラ - となっていました。父はこの思想に大変感銘を受けました。間もなくク伯夫妻がベルリンに来遊され幸運にもお会いする機会をあたえられ、それ以来すっかり共感し親交を深めることになりました。ある時ク伯が「真の平

和は実践的でなければならない。これからヨ - ロッパとアジアは組織化する必要があり、自分はヨ - ロッパを組織化し、パン・ヨ - ロッパの実現に全力を注ぐから、君はアジアの組織化をやるべきである。パン・ヨ - ロッパとパン・アジアは提携して真の世界平和の実現に努力しようではないか。」と仰いました。若き日の父は彼の言葉にいたく感動し、一生ク伯を尊敬し親交を続けておりました。ク伯は、明治27年(1895年)当時駐日オ - ストリア代理公使であった父のハインリッヒと日本の婦人青山光子との間に二男として東京で誕生しました。ク伯にはヨ - ロッパ貴族

の家系と、日本の血が受けつがれているので、一層親近感を感じたようです。

父は生涯パン・アジア構想を実現したいと願っておりましたが、なかなか機が熟さず亡くなる2年前にその理想の実現を祈念して郷里にパン・アジアの碑を建て、後世に残そうと考えたのだと思います。

20世紀の終りはヨーロッパでは欧州共同体の成長によりユーロの実現となりました。次の21世紀に向けて父の夢でありましたアジア連帯の方向に向かいつつあり、是非これが実現するよう願っております。

近年、情報や交通の発達により世界は急に狭くなり身近に感じるようになりました。特に奨学財

団を始めてから各国の若者達とおつき合いするようになり、学問的にも経済的にも、また日常生活においても、国境はなく心と心は通じ合えると強く感じるようになりました。私は最近海外に出かけますと、その地に住むラクーン会(渥美奨学生の同窓会)の方々にお会いするのを楽しみにしております。3月にはニューヨークへ行きまして、一夜をマンハッタンの中国料理屋で第一期生のミッシェルさん、2期生のメラニさん、3期生の張さん、4期生の孫さん、5期生の侯さんの各々家族同伴で集まって、皆財団の思いで等を日本語で語り合いとても楽しいひと時をすごしました。ますますこの輪が広がっていくことを願っております。



第1回鹿島平和賞の授賞式(1967年10月30日)に出席する鹿島和夫(右)とクレーデンホーフ伯爵

第1回鹿島平和賞の授賞式は、1967年10月30日に鹿島平和財団にて開催されました。鹿島氏は、「私が伯爵と知り合ったのは1922年、今から45年前で、当時伯爵はパン・ヨーロッパユニオンを創立して、ドイツ、フランスはもとより全ヨーロッパにおいて、この運動を、活発に推進しておられたのであります。私も、それに非常に感銘し、伯爵の世界的名著「パン・ヨーロッパ」の翻訳に着手した次第であります。私はそのとき伯爵が申された言葉を忘れることが出来ません。それは、世界平和を実現するためには、現在の雑然と併存する51カ国からなる無力な国際連盟を、世界の5大地域の上に立脚することが必要である。すなわち、ソビエトユニオン、パン・アメリカ、ブリティッシュ・エンパイアの3地域は既に成立しているが、未だヨーロッパとアジアは未組織であると申されたことでもあります。現在自分はパン・ヨーロッパの成立に日夜努力しているが、君はパン・アジア運動を起して、アジアを組織化すべきである。それでまもなく私は外交官を辞して、パン・アジアを提唱して郷里から衆議院選挙に立候補しましたが、不幸にして僅か3千票しか得られず落選しました。このことを伯爵にお知らせしたら、何も失望することはない。地域統合及び、協力は時代の趨勢であるから、必ず実現するに違いないと励ましてくれたのであります。私は、一昨年の参議院議員選挙には全国区で百万票を越える票を得て第一位で当選いたしました。私は今も、パン・アジアを提唱しておりますが、これは東洋における伯爵の勝利を意味するものであります。」と挨拶。これに対して、クレーデンホーフ伯爵は、「皆様の高貴なる祖国日本は、世界における平和の担い手となるべく運命づけられていると、私には思えます。世界にただ一つの平和主義的憲法である日本の憲法は、皆様をして、この道へと進ませているのであります。」と謝辞を述べ、次のように結びました。「この忘れがたき瞬間において、私の想いは、母のもとへと向かっております。(略)母は、ヨーロッパへ発つ前に、昭憲皇太后陛下にご引見を賜るという光栄に浴したのであります。その時陛下は、すばらしい象牙造りの扇を餞別として賜るとともに、ヨーロッパで新生活に入った後も、決して祖国の名誉を忘れることのないよう、と申されました。母は、そのことを陛下にお約束いたし、その死に至るまで、この約束に忠実であり続けたのであります。ここに、母の霊に祝福あれと祈ることをお許しいただきたく存ずる次第です。」 鹿島平和研究所編「第1回鹿島平和賞授賞の記録」参照